

西欧文化における柳の研究—その 1

墓石，追悼画および陶磁器を中心に

黒沢 眞里子*

はじめに

本論文は、欧米文化における柳 (willow) の研究である。柳のなかでも特に柳の代名詞ともなっているシダレヤナギ (*Salix babylonica*, 俗名 weeping willow) を対象とし、柳と表記されたものは、とくに断りのない限り、シダレヤナギを指すものとする。柳は東アジア原産で、それがヨーロッパに伝わり、鑑賞樹として植えられるようになった。そのしなだれた姿から、死を悲しむ喪のシンボルとして使われるようになる。アメリカでは、18世紀後半の独立戦争前後に墓石に柳が登場し大流行となる。当時の古い墓地を訪れると、柳が彫られたスレートや大理石の墓石を多く見かけ、なぜこれほど多くの柳が流行したのか驚きとともに疑問がわいてくるのである。

喪のシンボルとしての柳は墓石だけでなく、追悼画 (mourning picture) にも描かれた。家族の死に頻繁に見舞われた当時の人々が死者の思い出として絹や紙に美しい景色と墓を刺繍などで描くことが流行った。そこには、ほとんどの場合柳が描かれている。こうして柳は墓石や追悼画から始まり、葬儀の告知から哀悼歌のブロードサイドを含めあらゆるメディアで目にする追悼・葬送のシンボルとなっていく。

柳ブームに火をつけたのは、セントヘレナ島に流されそこで没したナポ

*専修大学文学部教授

レオンと柳の木の逸話である。ナポレオンが魅了されその下で瞑想したと言われる柳は、本人の希望で死後に彼の埋葬場所となった。19世紀半ばの中西部で、リンチによって殺されたある男は、その手記のなかで自分の墓について細かい指示を与えている。それは、柳が植えられたナポレオンの墓であった。さらには、故郷ケンタッキーの「セントヘレナ」と名づけられた島に埋葬して欲しいと言う。なぜ、ナポレオンの柳がこれほど強力に、本来なら名もなき一生を終えたはずの一市民にアピールしたのだろうか。ここでも疑問がわいてくるのである。

追悼・葬送とは別の方面から、柳はさらに一般大衆の想像世界に深く浸透していく。ブルー・ウィローと呼ばれる陶磁器を通じてである。18世紀後半にイギリスでシノワズリ（中国趣味）の流行から生まれたこの陶磁器には、その名前が示すように柳が描かれている。ウィロー・パターンの風景から連想される物語は大衆の想像力を大いに刺激し、大衆を魅了し、どの家庭でも必ず目にするディナーウェアとなった。人々はこれらの食器を見ると子供時代を懐かしく思い出すのである。柳が陶磁器の一カテゴリーを表す一般名称にもなるほど人気を博し、現代でも生産が続けられているロングセラーとなったのにはどのような理由があるのだろうか。

欧米人の現実・想像世界のなかで一植物がこのような広い分野で圧倒的な地位を占める現象は柳以外にあるだろうか。西洋人の柳狂いとも呼びたくなるような、柳への熱狂は、西欧文化、とくに大衆文化研究として重要である。しかしながら、葬儀や陶磁器や園芸等のそれぞれの分野で柳が注目されても、分野を超えてこの現象をとらえる視点は、当時の文献のなかにも見られず、学術的研究もなされていない。英文学者ジョン・W・ドレイパーは、哀歌の柳のシンボリズムと、シノワズリの陶磁器、庭園のブームと関わりがあるのではないかと述べており、¹⁾ また陶磁器研究家のジョージ・L・ミラーは、ウィロー・パターンに関する書籍のレビューで、社会史や装飾美術、神話や民間伝承など広い分野からウィロー・パター

ンを理解する必要があると指摘している。²⁾柳がなぜこれほどまでに人々を魅了したのか、どのような方法で彼らの想像世界に深く浸透していったのか、それぞれの分野の垣根を超えて柳の熱狂現象を比較考察することが必要であり、その一つの試みが本論である。

本論では、柳の学名の検討から始め、樹木としての柳のヨーロッパ、アメリカへの導入の歴史、墓石、ブロードサイド、追悼画、陶磁器の柳の使用とその表象について考察し、それぞれの影響関係について分析する。柳についてはすでに筆者の他の著作で研究を行っているが、³⁾本論では、柳の欧米への導入の詳細な検討と、新たにウィロー・パターンの陶磁器を取り上げ、柳の絵柄と物語の分析、墓石や追悼画との図像・シンボリズムの比較を行う。ナポレオンの柳に関しては、詳細な考察が必要である為に、西欧文化における柳の研究—その2として、別に論じることにする。

Salix babylonica

シダレヤナギの学名 *Salix babylonica* の *babylonica* は、聖書の柳からとられたものである。

バビロンの川のほとり、そこで、私たちはすわり、シオンを思い出して泣いた。その柳の木々に私たちは立琴を掛けた。〔詩編137編〕

バビロンに捕囚された古代イスラエルの人々が、バビロン川の柳に立琴を立てかけ、故郷のシオンを思って涙したという話である。柳と言えば聖書のこの部分を連想させるものと考えられていたが、最近の研究によると、聖書の柳はバビロニアのユーフラテス川に自生するコトカケヤナギ、別名ユーフラテスポプラ (*Populus euphratica*) だとされている。⁴⁾若木のと

きには柳のような葉をしているので、柳と混同されやすい。この誤りは1978年の新国際版聖書では訂正され、the willowsの代わりにthe poplarsが現在では用いられている。

シダレヤナギの学名 (*Salix babylonica*) はリンネ (Carl von Linné, 1707–1778) によって名づけられたものであるが、彼が初めてシダレヤナギを見たのはオランダのハルテカンブ邸 (ジョージ・クリフォード [George Clifford III, 1685–1760] の夏の別荘) の庭園だった。⁵⁾ リンネは、植物愛好家・収集家であるクリフォードの依頼で、1736年から1738年までここに滞在し、ハルテカンブ邸の植物に関する記録、*Hortus Cliffortianus* を1738年に出版した。その本の454頁に、バビロニアに生えている木として *Salix babylonica* が紹介されている。⁶⁾ リンネは1753年に著した『植物の種』 (*Species Plantarum*) で、29種の willow を記述しているが、その中でヨーロッパ起源ではないものは一つだけで、それが *Salix babylonica* である。*Salix babylonica* の模式標本として、植物標本集に異なるソースから集めたと思われる4つの標本が収められており、その一つの標本シートに「中国」というメモが残されている。⁷⁾ このことから、リンネが1品種の柳に基づいて命名したのか、柳の原産地がアジアであることを知らずに *babylonica* と命名したのか、はっきりとは分からないとされている。⁸⁾ 現在では、シダレヤナギ (*Salix babylonica*) は中国中央部、北部にもともと自生していたものとされている。

柳のヨーロッパへの導入

ヨーロッパに初めて柳を持ち込んだのは、フランス人の植物学者ジョゼフ・ピトン・トゥルヌフォール (Pitton de Tournefort, 1656–1708) と言われ、17世紀後半に旅先から持ち帰ったとされている。⁹⁾

イギリスの植物学者ピーター・コリンソン (Peter Collinson, 1694-1768) によると、イギリスには1730年になるまで柳は入ってこなかった。それ以前の1675年に、アジアを旅した神父で旅行作家のジョージ・ウェラー卿 (Reverend Sir George Wheler, 1650-1723) によって、柳の木が目撃された記録はある。

…その大きな枝は大変しなやかで、地面にまで垂れ下がっている…。
そして自然に、そのまわりに風情のある緑陰を形成している。¹⁰⁾

コリンソンによると1730年になって、柳はシリア北部の都市アレppoから、イギリスに持ち込まれたとされている。「トルコのアレppo [アレppoは当時オスマン帝国の支配下にあった] のヴァーノン氏 (Mr. Vernon) が、ユーフラテス川の柳をイギリスに持ち帰り、自邸のあるトウィッケナム・パークに移植した。この柳が育っているのを1748年に見ている。」「この柳こそわが国の庭園にあるすべての柳の親である」とコリンソンは書いている。¹¹⁾ヴァーノン氏とは、ナイトの称号をもつサー・トーマス・ヴァーノンの次男で同名の、トーマス・ヴァーノン (Thomas Vernon, b.-1726) であるが、ヴァーノンは1726年に死亡しているので、何らかの記憶違いがあるかもしれない。

また、イギリス最初の柳として、詩人のアレグザンダー・ポープがスペインから送られた柳のフルーツバスケットの枝を挿木にしたという逸話があるが、コリンソンは、これは1801年8月付の新聞が唯一の情報源であるとも付け加え、単なる逸話であることを示唆している。¹²⁾柳のバスケットから発根して柳になったという話は、アメリカにもあり、それについては後に述べる。

オックスフォード英語辞典 (2011年) によると、weeping willow が初めて文献に現れるのは、1731年、フィリップ・ミラー (Philip Miller, 1691

年-1771年、スコットランドの園芸家)の『園芸事典』(*The Gardeners Dictionary*), 1731)とされる。これはコリンソンが注釈を書き加えた本であるが、彼のノートによれば柳がイギリスに持ち込まれたと同時に、weeping willowという言葉が使われ始めたことになる。しだれた様子を表す weeping は、それ以前にも elm (ニレの木, weeping elm) に使われていた。¹³⁾

しかし最近の研究では、マギー・キャンベル=カルバーなどは『植物の起源』のなかで、1730年以前、フランスに柳がもたらされた時期と同じ頃、イギリスでも柳はよく知られていたのではないかと指摘している。¹⁴⁾ その証拠として、第1代デヴォンシャー公爵ウィリアム・キャベンディッシュ (William Cavendish, 1st Duke of Devonshire, 1640-1707) の庭園につくられた柳の噴水をあげている。キャベンディッシュは1693年、キャッツワースに広大な庭園と噴水システムをつくる際に、フランス人技師のムシュー・グリエを雇った。グリエはフランスに新たに入ってきた柳を見たに違はなく、伯爵に柳の木の話をしたところ、伯爵は実物大の木のモデルをつくらせ庭に設置させた。銅と鉛で作られた柳の幹と枝からは水が突然噴射され、訪れたゲストや家人を驚かしたという。この柳の噴水は1830年代にジョセフ・パクストンによって再び銅と真鍮を使い、800カ所から木がまるで泣いているように水が噴き出すようにつくり直され、現在もキャッツワースで見る事ができる。

さらに、旅行家のシーリア・フィーネス (Celia Fiennes, 1662-1741) も柳が実際どのようなものか知っていた可能性をキャンベル=カルバーは指摘する。キャッツワースを訪ねた時の日誌に次のような柳の噴水の描写があるからだ。「森の近くに立派な柳の木が立っていて、葉っぱも、幹もみな自然に見える。根本にはがれきや大きな石で埋め尽くされ、突然弁が開かれると葉や枝から水がシャワーのように吹き出す。真鍮とパイプで作られた葉はその外見はまったく柳そのものだ。」¹⁵⁾ 日記の日付は1697年であるので、これも、柳が1730年よりずっと以前にイギリスに入っていた

証拠であるとしている。¹⁶⁾

柳のアメリカへの導入

アメリカに柳がもたらされたのも1730年以降であるとされている。¹⁷⁾ ニューヨークのフラッシングの苗木商ウィリアム・プリンスの1790年のカタログに、weeping willow がすでに登場している。¹⁸⁾ アメリカ最初の柳に関しては、いくつもの逸話が伝えられている。その一つは、ヴァージニアのクック将軍 (John Hartwell Cocke Jr., 1780-1866) の話として伝えられるもので、フィラデルフィアの商人トマス・ウィリング (Thomas Willing, 1731-1821) が北大西洋のマデイラ諸島からフルーツバスケットを受け取った。彼はバスケットを裏庭の穴に捨てたところ、その一部が発根してアメリカ初の柳になったというものだ。ジェファソンは1775年にその柳を見ており、その大きさから、植えられて4、5年は経っているだろうと記している。¹⁹⁾ これが真実であれば、植民地時代にすでに柳がアメリカに導入され、プリンスのカタログに載る1790年頃には、人気の商品になっていたことが考えられる。しかし、柳のバスケットが発根する逸話は英米に存在するが、そのような状態の柳が発根することは考えにくいだろう。より信頼できるものとして、1794年、ヴァージニアのジェファソンが『ガーデンブック』の中で、同年に植える予定のものとして柳をリストしている。²⁰⁾ 実際、1794年3月には、17、18、19日を使って2,400本の挿木を、低地や泉の周り、道に沿って敷地内に植えたと記録されている。²¹⁾ 筆者によるブロンクスにあるニューヨーク植物園マーツ研究図書館の調査では、苗木商プリンスの1820年、22年、30年のカタログにも weeping willow は引き続きリストされており、プリンスのカタログが示すように、1790年代頃から19世紀前半に柳が人気の商品となっていったことが分かる。

柳の歴史に関する興味深い記事が1871年の『月刊スクリブナーズ』誌に掲載されている。「The Weeping Willow」と題されたこの記事は、父が息子の疑問に答える形で、英米の柳の歴史が分かりやすく説明されている。著者は当時の人気歴史家ベンソン・ジョン・ロシング (Benson John Lossing, 1813-1891) である。ハドソン川を見下ろす山の頂上の美しい高台にある著者の家に柳を植えたところから話は始まる。なぜ「weeping willow」と呼ぶのかという息子の疑問に、著者は詩編137編を引き合いに出して説明する。さらに、柳が欧米に伝わった歴史として、イギリスの詩人ポーブの名前があげられる。よく知られた柳のバスケットの逸話かと思うと、さすがに歴史家だけあって、史実に照らした話が語られている。「南海泡沫事件」で資産を失い、アジアとの交易に転じたポーブの友人が、小アジアの古い港町スマーナから特産の乾燥イチジクの箱をポーブに送ったという。箱のなかを開けると、挿木にする枝も混じっていて、ポーブはそれをトゥイッケナムの自宅の庭、水辺近くに植えた。そしてそれが成長して柳と分かり、ポーブを喜ばせた。アジアの旅行記を読んで柳に心引かれていたからだ。この柳は、イギリスで唯一の柳となりポーブは丹誠込めて育てた。それがイギリスのすべての柳の親であるという。

ポーブの死後も新しい所有者によって屋敷と庭が維持され、1775年にその柳の挿木がアメリカにもたらされた。おそらくこの挿木こそ、アメリカに広まった柳の起源であると述べられている。一方イギリスでは、世紀が変わって19世紀となり、屋敷の新たな所有者となったイギリス婦人—しかも爵位のある貴族—がポーブの柳を切り倒してしまったことが語られる。文人が慈しんだ柳を少しも理解しない俗物イギリスから救われたかの様に、ポーブの柳の木は、ちょうど独立の気運にもえたアメリカに移植されたというわけだ。ちなみに、ロシングはアメリカ独立の歴史書の著者として有名である。

その柳の逸話であるが、やはり愛国主義的なトーンを帯びてくるのだが、

アメリカに持ち込んだのは、アメリカに駐留するクリントン将軍の若い補佐官だった。アメリカで農場をもつことが夢で、農場に植えるために渡米直前にトゥイッケナムを訪れ、ポープの柳から挿木の枝をとってきた。一方アメリカでは、ワシントンの養子（妻マーサの連れ子）のジョン・パーク・カスティス（John Parke Custis, 1754-1781）が、休戦時にワシントンの使いとして両軍を行き来していたときに、柳の挿木をもってきたこの若い補佐官と親しい知り合いになる。1776年早春、イギリス軍がボストンから撤退する時に、夢破れたこの青年補佐官は、柳の挿木を友情の印としてカスティスに贈ったという。結婚間もないカスティスはヴァージニア、アピンドンに屋敷を手に入れていた。アメリカ軍がボストンを引き上げるとすぐに屋敷にもどり、家のそばに挿木を植えた。その柳はトゥイッケナムの親木と同じくらい大きく成長し、アメリカのすべての柳の親となったということだ。この話は、ワシントン将軍の補佐官であったパーク・カスティスの息子から著者が直接聞いたものだという。

これにはまだ話の続きがあり、独立戦争でアメリカ軍を指揮したゲイツ将軍とこの柳の関係が語られる。ゲイツは、イギリスの有名な政治家・文人のホレス・ウォルポールが名付け親であり、ウォルポールといえばトゥイッケナム近くに有名な「ストロベリー・ヒル」を所有していることも忘れずに読者に思い起こさせている。ゲイツ将軍は戦後、アピンドンから柳の木を苦勞して移植し、ニューヨーク郊外（といっても当時はロアーマンハッタン）ローズヒルの自邸へと続くアプローチに植えたという。それは、アピンドンの親の柳の根から生えたもので、威風堂々とした立派な柳に成長した（図版1）。ローズヒルの屋敷は、1845年の火災で焼失するが、その火災を著者は目撃したと書いている。周辺が田舎から都会に変貌してもポープの柳の孫柳は生きながらえたということだ。

カスティス以前にサミュエル・ジョンソン博士がポープのトゥイッケナムの柳の挿木をもって来たという別の逸話も紹介されるが、著者は細かな



図版1 ゲイツ將軍のマンハッタン私邸，ローズ・ヒルの柳。
(*Harper's New Monthly Magazine*, Vol. 24, 1862より)

事実をあげてこれを否定している。独立革命以前に，アメリカに生えている柳について書かれているものに著者の知る限り出会ったことはないのだから，カステイスの話は真実と考えてよいだろうと結論づけている。イギリスとアメリカの柳はすべて，英語文化が生み出したたぐい稀な天才ポーズを讀めるべく美しく，詩的な生きる記念碑であるとしめくくられている。²²⁾

墓石の柳モチーフの流行

柳がアメリカで植えられ始めた18世紀末は，墓石のデザインモチーフとして柳が流行した時期でもあった。ニューイングランド地方の17，18世紀の墓石は当時の死生観を伝える豊かな図像や文様が彫られており，芸術的

ですらある。考古学者のエドウィン・デスレフセンとジェイムズ・ディーツは、ニューイングランド地方の墓地を調査して、そのモチーフが時系列的に変化することを突き止め、骸骨と天使に続いて、1780年代以降になると柳と骨壺のモチーフが古いモチーフにとってかわることを明らかにした。²³⁾ 田園墓地研究者のブランチ・M・G・リンデンも、柳が描かれたもっとも古い墓石として1760年代の墓石を見た事があると述べているが、広く見られるようになるのは1780年代、90年代になってからとしている。²⁴⁾ 1800年から30年間に流行のピークに達し、柳の描かれ方も、初期の絵文字風の簡単な線画から南北戦争後にはよりリアルな立体的高肉彫りへと変化している。²⁵⁾

墓園に植えられた柳

柳は実際に墓地にも植えられた。とくに、1830年代アメリカ東北部に登場する田園墓地あるいは庭園墓地と呼ばれる美しい自然風景観が特徴の墓園に、メランコリーな優美さを表現するのに最適な樹木として植えられた。柳は春になるとまっさきに芽吹くことから再生のシンボルとして、また地中の水をよく吸い上げる為に墓地にふさわしい樹木となった。19世紀イギリスの著名な造園家、ジョン・クラウディス・ラウドンは、1840年、柳(The female Babylonian, or Weeping Willow) について、中国やトルコ、フランスやドイツでも柳は庭だけでなく墓地にも植えられていると述べている。イトスギよりも柳が好まれる理由を、フランスの植物学者ポワレ(Jean Louis Marie Poiret, 1755-1834) の言葉を引用して以下のように説明している。

イトスギは長い間墓地に相応しい木と考えられて来た。しかし、墓に

かかるその陰鬱な影と、濃い緑の重々しい姿は気をめいらせ、おぞましい死のイメージを引き起こすだけだ。それに対し、柳は墓地の陰気なイメージというより、死者に対する深い悲しみの気持ちを伝える。その軽やかで優雅な枝は、乱れ髪のように、そして骨壺にしなだれる悲しみの像の優美なドレープのように揺れ動く。軽いメランコリーな気分になるものの、心が鎮められる柳は、詩人をしてこう言わしめた。「深い悲しみのなかにさえ喜びがある！」²⁶⁾

興味深い点は、このような、柳が演出するロマンチックな墓園風景は、実際の庭園墓地がつくられる前に、追悼画のイメージとして人々の心に浸透していたことである。19世紀の柳のイコノロジー研究では、現実と空想、実物とイメージの両方の側面から考えることが必要である。次に、追悼画について、簡単に触れる。

追悼画の柳

追悼画とは、18世紀末から19世紀前半、とくに北東部で流行した死者を追悼するための刺繍や、絵、それらを組み合わせた作品を指す。²⁷⁾ 墓や骨壺、柳の木やオークの木、涙を流す追悼者、田園風景などが特徴となっている。柳が描かれたもっとも初期の追悼画は、1796年の制作とされている。麻地に多色の絹糸で刺繍がなされ、1796年3月24日に亡くなった母親を偲んでつくられた。大きなアーチの両脇に柳の木が2本描かれ、全景には2つの台座の上の骨壺が描かれている。ロードアイランド州プロヴィデンスのメリー・ボールチの学校でおそらく制作されたものとされている。²⁸⁾

アメリカにおける追悼画の流行は、1799年のジョージ・ワシントンの死



図版2 サミュエル・フォルウェルのワシントンの死を悼む追悼画。
Philadelphia, ca. 1800. Paint on silk
 (Anita Schorsch, “A Key to the Kingdom” より)

がきっかけとなった。ワシントンの死を悼んで国中が喪に服し、ワシントンの死を称揚する哀歌や絵、陶磁器（イギリス製）が大量に生産された。ワシントンの追悼画でもっとも普及した絵は、サミュエル・フォルウェル (Samuel Folwell, 1764-1813) のものである (図版2)。リバティ・キャップをもったアメリカがワシントンの墓にうなだれ、国父の死を嘆いている。右側には、墓を覆う柳の木が描かれている。図版3は、フォルウェルの絵を真似た追悼画で柳はさらに大きく垂れ込め、左側には独立戦争で負傷した兵士がワシントンの死を悲しんでいる。国父の死がきっかけとなり、ワシントンの追悼画が流行するが、すぐにこの英雄に代わって、身近な家族の死を悼むよりプライベートな追悼画が数多く制作されるようになった。それらの絵には必ずと言ってよいほど、柳の木が描かれている。時として賑やかな港町が遠景に描かれる時もあるが、ほとんどは牧歌的な風景のなかに、墓と柳と追悼者たちが描かれる (図版4)。

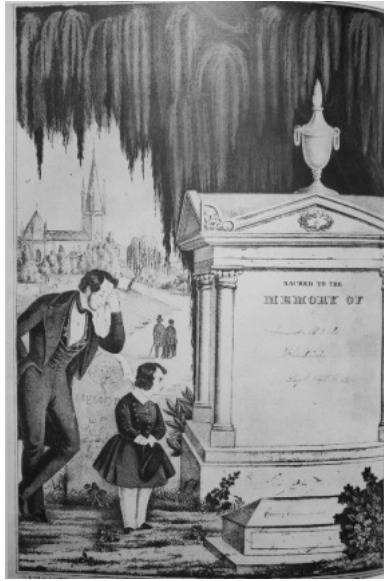
刺繍の追悼画の流行は1830年代まで続き、40年代になると、墓石彫刻から、それまで盛んに使われてきた柳と骨壺のモチーフが突如として消えた



図版 3 フォルウェルの絵を真似て制作されたワシントンの追悼画。
Probably Pennsylvania, 1800-1810. Silk and paint on silk.
(Anita Schorsch, “A Key to the Kingdom” より)



図版 4 追悼画。c.1805-1815. Amelia Russell Smith. Smithtown,
Long Island, New York. (*A Time to Mourn* より)



図版5 印刷された追悼画“Sacred to the Memory of 1847.” N. Currier.
(*A Time to Mourn* より)

ように、追悼画も姿を消し始める。印刷の追悼画が大量に現れ始めたこともその衰退の原因である（図版5）。

ブロードサイドの柳

イギリスのブロードサイド・エレジー（死者を悼む哀歌）を研究したジョン・W・ドレイパーによると、哀歌を印刷したブロードサイド（木版）に柳はよく見られるが、17世紀にはまったく登場しない。17世紀のイギリスの墓石でも柳の図像は見た事はないと述べている。²⁹⁾ 柳はもともとイギリスの伝統では死を連想させるものではなく、悲恋と結びついていた。その悲しみが友や庇護者を失う悲しみへと拡大するのは17世紀半ばからで

あった。その変化の説明としてドレイパーは、恋愛に偏見をもち、宗教的な瞑想を好んでいた当時支配的だったピューリタンの考え方が関わっているのではないかと推測している。³⁰⁾ 柳の木のシンボリズムが変化することにより、ローマ時代から葬送のシンボルであったイトスギや、イギリスの教会墓地に伝統的に植えられていたイチイとともに、柳が追悼・葬送のイコノグラフィとして使われるようになった。この意味の拡大には、前述の聖書の記述——国を追われた古代イスラエル人が故郷を偲んだユーフラテス川の「悲しみの柳」——も影響していることは間違いないとドレイパーは指摘する。³¹⁾ その証拠として「大英帝国の大いなる悲しみ：もっとも比類なきプロテスタンの王女、故メリー英国女王の葬儀」(1695)と題された哀歌のブロードサイドのなかで、「美しい乙女たち」に立琴を「悲しみの柳」に立てかけるよう促す場面が描かれているからだ。これは聖書の記述に基づいていることは間違いなく、明らかにピューリタンの思想であるこの哀歌こそ、追悼・葬送への意味拡大にピューリタニズムが何らかの関わりをもっていたことを示しているとする。³²⁾ そして、18世紀になると、悲恋と結びついた柳の木のシンボリズムは消失し、追悼・葬送の連想をもつようになるが、シンボリズムやアレゴリーが嫌われた古典主義時代を経て、ロマンチズムの時代になってようやく柳のシンボリズムは広まった。実際の柳の木の導入—陶器や庭などの中国ブームと同時期—がおそらくこのシンボリズムに新たな流行をもたらす助けとなったのだろう。確かな事は、18世紀末になると、柳の木は追悼・葬送のシンボルとして詩や追悼画、墓石にまで広く使われるようになったことだ。³³⁾

以上、柳の木の欧米への導入、墓石彫刻、追悼画、哀歌等の資料から明らかになったことは、柳の木は1730年以降中国から欧米に持ち込まれたが(weeping willow が始めて文献に登場するのは1731年、リンネが *Salix babylonica* と命名するのは1738年)、追悼・葬送のシンボルとしての柳の流行

は1780, 90年代になってからであった。そのピークは、19世紀最初の30年間であり、そのピーク時にはロマンチックな景観が特徴の新たな田園墓地が誕生している。

シノワズリとブルー・ウィローの誕生

柳のイコノグラフィを考える上で重要なもうひとつの柳の熱狂現象を見てみたい。ブルー・ウィロー陶磁器の製造と普及である(図版6)。ドレイパーが指摘するようにシノワズリの流行から生まれたブルー・ウィロー陶磁器の人気の、柳の木のシンボリズムに何らかの影響を与えたことは確かだろう。しかし、ブルー・ウィロー物語に、死との連想はあるものの(物語の最後に二人とも死んで2羽の鳥になる)、新たに柳が獲得した追悼・葬送のシンボリズムと関わるというよりも、18世紀に消失した—とドレイ



図版6 スタANDARDなウィロー・パターンの大皿。ストーンウェアにブルーの転写プリント。19世紀半ば。
(*The Illustrated Encyclopedia of British Willow Ware* を参考)

パーが指摘する一悲恋と結びついた古い柳のシンボリズムがブルー・ウィローの中で生き長らえたと考えるべきではないかと筆者は考えている。ブルー・ウィローの物語は、この古い悲恋の連想が下敷きとしてあったからこそ、英米の人々にアピールしたのではないだろうか。この点を論証すべく、ブルー・ウィロー陶磁器の歴史的背景とそれが伝える物語、追悼画等との図像比較を試みたい。

ヨーロッパで東洋、とくに中国ブームが生じたのは18世紀中葉で、初めは貴族たちの中国趣味であったものが徐々に一般庶民にまで浸透した。ブームの終盤、1780年から1790年頃にそのブームに乗って、その後チャイナ(陶磁器)のデザインとしてもっとも知られるようになる中国趣味に彩られた「ウィロー・パターン」がイギリスで生まれた。中央に描かれた柳の木からこのように呼ばれたが、その起源はいまだにはっきりしない。カーフレイ窯(イギリスシュロップシャー州)のトーマス・ターナーか、カーフレイ窯で銅板転写の原版彫刻師として働いていたトーマス・ミントンが最初に考案したとするのが通説となっている。ウィロー・パターンが他のシノワズリのパターンと異なる点は、スタンダードなウィロー・パターンと同じオリジナルの中国陶器がないことだ。³⁴⁾ スタッフォードシャーのスポード窯の創設者ジョサイア・スポードが導入したマンダリンと呼ばれるパターンも(ウィローナンキンとも呼ばれる)、ウィロー・パターンの要素を多く共有している。スポード窯を研究したロバート・コーブランドは、スポードが馴染みの中国のパターンに、それにマッチする絵柄を加えたり、取り替えたりしてウィロー・パターンができたのだらうと述べている。³⁵⁾ コーブランドは、1969年にスポード窯で発掘された中国陶器にウィロー・パターンのアイディアとなったと考えられる絵柄が見つかったことなどから、スポードをウィロー・パターンの考案者としている。

ウィロー・パターンの成功によって、他の製造業者がこのパターンを模倣するようになり、業者はウィロー・パターンを中国に持って行き、ヨー

ロッパ、アメリカ輸出向けに同じような絵柄で陶器を制作させた。³⁶⁾つまり、ウィロー・パターンは、当初中国でよく知られた物語が下敷きとなっていると考えられていたが、図柄もそれに付随する物語も西洋人の想像力から生み出されたものだと現在では考えられている。つまり、物語から絵が生まれたのではなく、絵柄から逆に物語が生み出されたということになる。

ブルー・ウィローと悲運の男女の物語

ウィロー・パターンは、イギリスで最初に登場してから200年以上も生産され続け、今日でも市場に出回るロングセラーとなるが、その人気は、陶器に画かれた絵が伝える物語に負う所が大きい。³⁷⁾ウィロー・パターンに描かれた物語に関するもっとも初期の記事は、1849年にイギリスの『ファミリー・フレンド』誌に掲載されたものである。まず、この記事でどのように紹介されているか詳しく見てみたい。

「よく見かけるウィロー・パターンの物語」と題されたJ. B. L. という筆者によって書かれた記事は、「チャイナ」といえば、アジアの南北に広がる広大な帝国よりも、まずはマントルピースの上に飾られた陶磁器や食器棚の中の陶器類を人々はすぐに思い浮かべるだろうと述べている。優れた文明は東から生まれ、西洋に伝播してそこで頂点に達した。現在では西洋の技術の方が古い中国の陶磁器よりも格段に優れているのに、いまだに中国のパターン、様式が好まれている。その好例が、ブルーのウィロー・パターンであり、「他のパターンすべてを合わせても及ばない」程の人気だという。³⁸⁾

名前の由来は、皿の中央に柳の木が描かれているからで、それは葉を出す前に花を咲かせている春の柳の姿である。子供の頃から馴染みのある絵

柄であるが、橋の上の不思議な三人は誰だろう、どこから来たのか、權も持たない船頭は何をしているのか、島の家には誰がいるのか、なぜ二羽の鳩がキスをしているのか、と子供心に好奇心をそそられたという。この陶磁器に描かれた物語は、中国人にとっては、イギリス人のジャックと豆の木やロビンソン・クルーソーと同じように誰でも知っている話だと述べられている。この物語は中国のものだと信じられているが、これは真実ではないことはすでに述べた。

ブルー・ウィローに描かれている図柄と物語の説明を見ると、まず、右側には、立派な邸宅が描かれている。富を誇示するように中国では稀な二階建ての建物だ。建物の周りには珍しい樹木が植えられている。この屋敷の主は、多大な権力と影響力をもつ中国人で、皇帝の税務関係の部署に勤め財をなした。実際の仕事は秘書のチャンに任せていたが、商人たちが主人に渡す違法な賄賂は見て見ぬ振りをさせ、それに応じた報酬を与えていた。ところが、彼の不正を声高々に叫ぶ商人たちが現れ、妻の急死を機に早々この職から退いた。ここに描かれた屋敷は、一人娘クーン・シー(Koong-see)と、財産管理の為に秘書を連れて余生を送るために移り住んだ場所である。不正を追求されるような場合には、この秘書の力が必要だったため、彼も連れてきたのである。この青年が娘に恋をしてしまう。日が沈むと、クーン・シーは、大広間に続く階段に召使いととも現れた。暗くなると、密かに小径に抜けて遠くの場所まで行った。そこで二人は愛を誓い合った。ミカンの木のあたりから、二人の声が聞こえることもあった。夜になると、巨大なシャクヤクが、チャンが歩くたびに深紅の花びらを落とす。召使いの助けで、二人は父親に気づかれずに密会を重ねた。身分の異なる二人の結婚は決して許されないだろう。二人の逢い引きも、やがて父親の知る所となり、娘が屋敷の外に出るのを禁じた。さらに、木の柵を小径に沿って水際まで張り巡らした(図版6の絵柄参照)。召使いは解雇された。監禁された娘が戸外で体を動かすことができるように、大広間に隣

接した離れを造った。水にせり出した離れには、テラスが設けられ、娘が歩けるようにした。そこには出口がなく、外にでるには大広間を通らなくてはならず、そこには父親が常にいた。周りは水で囲まれていることもあり、父親はこれで安全だと満足した。青年が船で娘と連絡を取ろうものなら、窓近くに座っている父親に発見され、阻止されてしまうのだった。さらには、完璧を尽くして、娘を身分の高い裕福な友人タ・ジン (Ta-jin) に嫁がせることにした。男は、娘に相応しい金持ちであったが歳をとっており、若い娘との結婚を望んでいた。結婚は娘の同意なしに決められた。婚礼は「桃の咲く春、縁起のよい月齢に」執り行われることになった。まだ、柳は花をつけたものの、桃はつぼみすらつけていない。娘はこの運命を恐れ、牢獄の窓越しに桃のつぼみを眺めた。しかし、よい兆候があった。鳥がやってくるようになり窓の上に巣をつくったのだ。

長い間バルコニーに座り、鳥の巣づくりを眺めていると、かつて逢い引きをした夕刻となった。そのまま留まって水を眺めていると、半分に割られた椰子の実が舟のようにこちらに漂ってきた。傘でたぐり寄せると、そこには竹紙があり中国の詩が書いてあった。それは、他の鳥の巣に自分の卵を産みつけるカッコーになぞらえた、権力者が巣を壊し、つましい身分の男と愛を誓った女性を奪う悲恋の話であった。この詩は、ジョーンズによって『アジアとの交易』(正式名は、*Transactions of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, London, 1830) のなかで翻訳されたものと注で述べられている。³⁹⁾ ジョーンズとはインド研究者として名高いサー・ウィリアム・ジョーンズ (Sir William Jones, 1746-1794) で、イギリス人をアジア文学に夢中にさせた人物である。中国古代の詩がこのような形で紹介され、娘が幽閉されている建物に鳥が巣をつくる話となり、恋人も鳥を見たに違いないと娘に思わせる。クーン・シーは東洋の詩のメタファーに気づく。「あなたに近づく舟に私の思いを乗せるが、柳の花が幹から垂れ、桃のつぼみがほころび始める頃、あなたの誠実なチャンは、ス

イレンの花とともに、水中深くに沈むだろう。」スイレンの花は、咲き終わると水の中に沈むとされている。チャンが自殺をするのではと娘は恐れた。中国では自殺は犯罪というよりも、徳と考えられていると注がつけられている。娘の返答は、「賢い農夫（husbandmen）であれば、盗まれそのような果実を収穫しないはずがありません。日は長くなり、葡萄畑はよそ者の手によって荒らされようとしています。柳の枝が幹から垂れ下がる頃には、あなたにこそ相応しい収穫を横取りされるでしょう。」その後、何の連絡もなく月日は流れ、柳の花も咲き終わり枯れてきた。

ある日父親が宝石箱をもって娘の部屋にやってきた。珍しい宝石は歳とった金持ちの婚約者からの贈り物だった。結婚の準備にこの屋敷にやってくるという。娘はすっかり希望をなくして泣くばかりだった。巢に危険が迫っても、それを逃れるすべはなかった。婚約者がやって来たその夜、慣習に倣って父親と客人は酩酊するまで酒を飲み交わし、眠り込んでいる間に、召使いに変装したチャンがクーン・シーのところにやってきて、二人は屋敷から逃げる。そのとき、婚約者からもらった宝石箱を持ち去り、柳のそばの橋までやってきた。そこで、父親が娘に気づき、大声をあげて二人を追う。それが皿に描かれた橋の上の3人だ。先頭はクーン・シー、生娘の印の糸巻きをもち、その後に宝石箱をもった恋人、最後は怒ってムチをもった父親である。二人は父親の追跡をかわして逃げおおせる。何日も捜索するも二人は見つからず、父親はすっかり絶望して諦めた。金持ちの官吏タ・ジンは執念深く何マイルも離れた村々を捜索し、もしチャンを見つけたら、宝石を奪った罪で死罪にすると自分に誓う。駆け落ちした二人は、父親の屋敷からそれほど遠くないところに、二人の逢い引きを助けて解雇された娘の元召使いに助けられて、ひっそりと身を潜めていた。そこで二人は密やかに結婚をする。それもつかの間、追っ手がやってきた。見張りの目を盗んで川に飛び込んだチャンは、船を見つけて隠れ家に戻り、クーン・シーを乗せてさらに遠くに逃げる。川を下ること数日、彼らはあ

る島にやってきて、ここを住処とすることにした。チャンは畑を耕した。彼らの勤労ぶりが単純な島の絵からも窺えるという。畑には畝ができていて最近耕したことが分かる。島の木々は小さく、まだ若木であることが分かり、島から出る残土はすべて島の埋め立てに使われ新しい土地が伸びて行く様が見てとれるという。

チャンは、農業で成功した後、農業に関する本を著し一躍有名になった。それによって最大の敵であるタ・ジンに居場所を知られてしまった。こうしてタ・ジンは、島を攻撃し、クーン・シーを捕え、チャンを容赦なく殺すよう秘かに命令を下した。奇襲された島民たちは、無防備であり、チャンは抵抗するも倒れた。それを見たクーン・シーは、絶望して自宅に火を放ち、自らそのなかで焼け死んだ。

神々は、タ・ジンに彼の残酷な仕打ちの報いとして不快な病気にかからせ、友も哀れむ者もなく寂しく死んでいく運命を与えた。死んだ二人を哀れみ、鳩に変えて永遠の命を与えたところで物語は終る。

ウィロー・パターンの物語を研究したベン・ハリス・マックラリーによると、これ以外にも広く知られた物語が複数存在していたようだが、この『ファミリー・フレンド』版が、繰り返し掲載されることにより、スタンダードなブルー・ウィロー物語となっていた。⁴⁰⁾

ウィロー・パターンの絵柄の主要要素

18世紀後半から19世紀前半にかけて、「ウィロー」と言えば、柳の有無に関わらず中国の風景が描かれた陶磁器すべてを指す用語であったが、⁴¹⁾ 本論でとりあげる柳の木が描かれたスタンダードなウィロー・パターンには共通した要素がある。橋とそれを渡る3人の人物、柳の木、船、立派な屋敷（コーブランドは「ティールーム」、『ファミリー・フレンド』版では



図版7 墓に彫られた柳。柳の枝が数本房になっている。
(写真 Johan Mathiesen 氏撮影)

「バンケットルーム」と呼ばれている)、二羽の鳥、前景の庭のフェンスなどである。⁴²⁾

柳の図像に注目してみると、ほとんどが似通っていてパターン化されている。幹が平均3つくらいに分かれその先から3本のしだれた枝が垂れ下がっている。枝の先はみな外側に跳ねている。多くの場合柳は橋のある左方向に傾き、二股に分かれた幹が途中で交差している。墓石に見られる柳は多様な形態をしているが、陶磁器ではほぼワンパターンである。このような特徴ある柳の図像は、墓石にも、追悼画にも見いだせない。墓石の柳で枝が房状になっているものはあるが、枝の先は跳ねていない(図版7)。ブルー・ウィローの柳の特徴は、どうも枝の先が外側に向かって跳ねている形態にあるようだ。幹が交差し、木自体も傾いているので、躍動感があり、軽やかな雰囲気を生み出している。それに比べて墓石や追悼画の柳の枝は重々しくまっすぐ下に垂れている。食卓では誰にも馴染みのある柳であるが、その柳が他のメディアにはそのまま用いられることはなかったと考えるとよいだろう。ブルー・ウィローの柳は、墓や追悼画の柳とは心の中で住み分けされていたのではないか。むしろ、先に述べたように、悲恋と

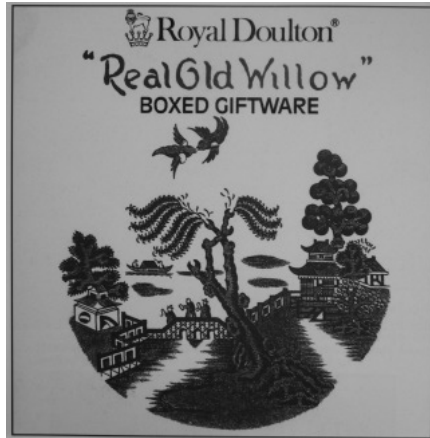
のつながりや、東洋の異国を想起させるエキゾチズムとより強く結びついていたのだろう。

ウィロー・パターンと追悼画の比較

ウィロー・パターンの柳と追悼画の柳の共通点をあえて捜してみるといくつかの興味深い点を指摘できる。両者ともに、柳の木が描かれていることは言うまでもないが、上で述べたように柳の描き方が大きく異なり、ウィロー・パターンの方が枝の数が少なく枝先が曲がり軽やかな姿である。一方追悼画の方は葉が茂った重々しい柳が墓を覆い尽くすように描かれ、存在感がある。しかし、両者ともに、牧歌的な自然風景のなかに描かれていることが特徴で、ブルー・ウィローは水辺が中心であるが、追悼画にも川や湖などの水辺の風景も描かれることが多い。

より柳に注目すると、ブルー・ウィローの柳は二本の大枝が交差して×印を描いているところが大きな特徴のように見える。おそらく、中国の柳の描き方で、柳の特性である柔らかさの表現として枝を交差させ、葉先を直線ではなくしならせて描いたのだろう。それが、中国画の描き方を知らない西洋人の目を通すと、描き方の意図よりも形自体が決まり事となり、それにこだわるあまりか、不自然にデフォルメされ、さらには単なる記号と化したようなものまで見つけることができる。図版8は、ロイヤル・ドールトンのパンフレットであるが、バランスをまったく無視したような上方の位置で二本の柳の枝を交差させている。

二本の枝が交差した柳は、追悼画のなかにも捜すことができる。図版2と3であるフォルエルが制作したワシントンの追悼画で、「追悼画の柳」で述べたように、もっとも広く普及し、追悼画の流行に大きな影響を与えたものである。この絵を見ると、柳の2本の幹または大枝が交差して×印を



図版 8 ロイヤル・ドールトンのパンフレット表紙に描かれた柳。
形がデフォルメされている。
(*The Illustrated Encyclopedia of British Willow Ware* より)

描いている。この大きな×印は、キリスト教のイコノグラフィに照らして、復活のあとに世界が再び始まる場所を表す象徴的な×印であると解釈する研究者もいる。⁴³⁾ ブルー・ウィローの柳の木の交差する枝との関係は明らかでないが、もともとは優美さを表現する為の絵画技法であったものが、他の文化では記号として認知され、記号そのものになってしまった例と考えると興味深い。

柳以外の共通要素として興味深いものにフェンスがある。追悼画にもフェンスが描かれたものがあり、フォルエルの絵には教会に続く道の片側にフェンスが張り巡らされている。追悼画の研究家のアニタ・ショルシュによると、フェンスは古くから聖母マリアの閉ざされた庭のメタファーであり、道は時を象徴し有限の時間から永遠へと移行する希望を表している。ワシントンの歩む道は、フェンスで閉ざされていた世界が開かれ天上へと続き永遠の存在となることを暗示している。⁴⁴⁾ 他の追悼画もよく注意してみると、あちこちにフェンスを見つけることができる。ブルー・ウィロ

一のジグザグのフェンスと同様に、フェンスを描くことは構図上の安定感やバランスをよくする為の絵画技法的な側面もあるに違いないが、見る者に慣習的メタファーから生じる心理的効果も与えているのだろう。人々の想像力を刺激して物語を膨らませる効果的な記号として作用していると言える。

ウィロー・パターンには、鳥が描かれているが、追悼画ではどうだろうか。ウィロー・パターンの鳥は、物語によると（とは言え、絵柄が先に存在したのだが）、悲劇的な死を迎えた二人のカップルが神々の情けで鳥となり、永遠の命を授かった姿を表している。追悼画でも空に何か描かれていないか捜すと、翼をもった天使がまず目につく。その一つ、1810年頃に制作されたアレグザンダー・ハミルトンの死と、それより数年まえに亡くなったワシントンを悼んだ追悼画には、翼をもった二人の天使が右上に浮かんでいる。若い国家が失った二人のリーダーを天国に導く天使たちである。⁴⁵⁾ 先のフォルエルのワシントンの追悼画には、左上には翼をもった



図版9 図版2の細部。空には天使と白頭ワシが飛んでいる。

天使、その左下には羽を広げた鳥が描かれている。これは、よく見ると足にオリーブの枝と矢をもつ白頭ワシであることがわかる（図版9）。この追悼画でフォルエルは、アメリカの国璽としてのワシ、天から地上を見張る正義のワシとの両方の意味をもつワシを描いている。⁴⁶⁾ ワシは、ローマ皇帝ティトを背中に乗せて天に運んだ逸話からも、死んだワシントンを神格化するシンボルとも理解できる。魂を天国運ぶワシは、ニューイングランドの墓石にも見いだすことができる。⁴⁷⁾ この墓石には、魂をお腹にかかえたワシが彫られている。追悼画の鳥（ときとして羽だけ描かれる）は魂そのものや魂が神の元に帰っていくことを象徴している。死者を天国に運ぶ役割を担う鳥であり、ブルー・ウィローの、死者が鳥に生まれかわる転生思想とは異なる。

ブルー・ウィローのアメリカでの流行

1780年代にアメリカで中国から輸入された比較的安価な白地に青の陶器が急速に普及しているという、イギリス人旅行者の記録が残っている。⁴⁸⁾ 東部に大量のブルー・アンド・ホワイトが入り、誰でもが買える安価な陶磁器が大量に流通することになったからだ。その背景には2つの要因がある。ひとつは、中国との貿易業者が、富裕層のための高価な陶器に加え、安価な陶器も大量に船荷に持ってきたことである。陶器は船荷として理想的だった。舟底に置いても湿気の影響はなく、海水の浸入を食い止め、陶器の積荷の上により高価な絹や茶を積むことができたからである。重い陶器は船の安定にも貢献した。アメリカの独立戦争が中国の陶磁器の輸入に大きな影響を与え、それまでイギリスに頼っていたアメリカは、イギリス依存を減らす為に、中国と直接取引をすることになる。こうして、1784年2月22日に、ニューヨークから広東に向かったアメリカ船を第一号とし

て中国との取引がその後3, 40年間続くことになる。ふたつ目の要因は、18世紀後半からイギリスで製造され始めたブルー・ウィローが、アメリカにも入るようになり、中国製の陶器よりも安く販売されるようになったからである。⁴⁹⁾

アメリカでブルー・ウィローが人気を得たのは、イギリスと同様に、その物語に負うところが大きい。とくにアメリカ人の共感を得た理由として、ブルー・ウィローを研究したジョン・R・ハデッドは2つあげている。ひとつは、貧しい青年と裕福な女性の恋愛は、エリート主義を嫌うアメリカ大衆にいつの時代も好まれてきたことである。さらには、この時代はジャクソニアン・デモクラシーの時代と言われ、「コモン・マン」(普通の人たち)が賞賛された時代でもあったことだ。安価なディナーウェアは、普通のアメリカ人でもブルー・ウィローやティーセットを楽しむことができること、チャンスをつかめば金持ちになれる夢をもつことができることを教えた。もうひとつは、当時の女性たちが、ブルー・ウィローを退屈な日用品とはとらえずに、そのような日常にチャレンジするもの、そこから逃避する手段として見たことである。彼女たちは単なる日用品でしかないものに、まったく新しい文化の形、つまり、物語と結びつたディナーウェアを発明したのだ。⁵⁰⁾

おわりに

筆者がこれまでに研究してきた墓石や墓地、追悼画と柳の関わりに加え、実際の柳の導入と陶磁器の柳との関係を総合的に分析してみた結果、いくつかの新たな発見があった。

墓石のモチーフとして柳が流行する時期と、イギリスで生産された陶磁器のブルー・ウィローが流行する時期とはほぼ同時期と考えてよいことが

明らかになった。両者とも1780年代から1790年代にかけて急速に広まった。追悼画は、ワシントンの死が流行のきっかけとなったために1800年代からやや遅れて流行する。1780年代は、アメリカの独立戦争と重なり、それが、中国との直接取引に転換させるなど、中国陶磁器のアメリカへの輸入に少なからず影響を与えていたことが理解できた。さらに独立戦争が、イギリスからアメリカに柳がもたらされるきっかけとなったと考えられていること、1790年代になると柳が苗木のカタログに載るまで人気の商品になったことなど明らかになった。実際の柳の木と、想像世界の柳の木は相互に影響し合い不可分の関係であったと結論づけられるが、これは柳のイコノロジー研究では重要な視点である。

その理由として、ブルー・ウィローが今日まで続くロングセラーとなった理由は、物語と結びついたユニークな商品特性（最近では商品を物語で売る商法は珍しくないが）にあることをみてきた。しかし、この特性は商品に限られるものではなく、実際の柳の木にもさまざまな逸話が付加され、それが柳を単なる一植物から、さまざまな伝説を生み出す歴史的、神話的樹木としていると考えられる。とくに、柳が英米に最初に植えられた逸話を見てみると、それが真実か否かは別として、むしろ現実と虚構を取り混ぜた形で、重要な歴史的人物・事件と結びついていることが理解できらう。イギリスでは偉大な文人ポーブが、アメリカではワシントンの養子やゲイツ将軍、サミュエル・ジョンソンも関わっている。「ポーブの柳」を紹介して、英米社会・文化の指導者たちが同じ親から生まれた植物を共有している。それが「親」からの断絶を決行した独立戦争中の出来事というのは興味深い。「親」イギリスから政治的に分離はするが、精神のもっとも優れた部分は「子」に具体的な形をとって引き継がれたことを暗示しているかのようだ。柳の木の逸話の主人公は常に男性であることにも、そのファンタジーの核心は愛国心や男同士の友情、愛国主義、男性のセンチメンタリズムと結びついていたと結論づけたい。ポーブの柳を無慈悲に根ごと

引き抜いてしまったのは女性ではなかったか。英雄と結びついた柳の頂点に位置するのがナポレオンと柳の逸話である。これについては、西欧文化における柳の研究—その2として、次の論文で明らかにしたい。

一方、追悼画やブルー・ウィローの柳は、女性の想像力の世界とより関わっていたと考える。当然、製作には男性も関わっており、またブルー・ウィローは男性にとっても子供時代を思い起こさせる懐かしい陶器に違いないが、そこから膨らむファンタジーの世界は、公的な世界というよりも、個人的な世界である。ジョン・R・ヘイデッドが「キャセイへの想像の旅—陶磁器を介して構築された中国, 1780-1920年—」で分析したように、現実の中国とは無縁のエキゾチズムに浸る個人的な喜びであった。

追悼画、墓石、陶磁器に描かれた柳の図像を比較してみると、家庭でよく目にするブルー・ウィローに影響された柳を追悼画や墓石に見つけてもよいと思うが、影響関係は見いだせなかった。ブルー・ウィローの柳は、追悼・葬儀という新たなシンボルというよりも、それより以前の古い悲恋のシンボリズムが保持されていた、つまり二つのシンボリズムは当時の人々の心の中で住み分けがされていた。それが、相互に図像に影響を与えなかった理由ではないかと考える。

謝辞

本研究は、平成23年度長期在外研究の機会を得て執筆できたことを付記し、専修大学に感謝の意を表したい。

注

- 1) John W. Draper, *The Funeral Elegy and the Rise of English Romanticism* (New York: The New York University Press, 1929), p. 337.
- 2) *Spode's Willow Pattern and Other Designs after the Chinese* by Robert Copeland. Review, by George L. Miller, *Winterthur Portfolio*, Vol. 17, No. 4 (Winter, 1982), p. 274.
- 3) 拙著『アメリカ田園墓地の研究—生と死の景観論』(玉川大学出版部, 2000年)
- 4) 英国人森林研究家・活動家の Richard St. Barbe Baker の研究による。Lesley Gordon, *The Language of Flowers* (London: Webb & Bower, 1984), p. 46.

- 5) Frank S. Santamour, Jr. and Alice Jecot McArdle, "Cultivars of *Salix babylonica* and other Weeping Willows," *Journal of Arboriculture* 14, 1988, p. 181.
- 6) Carl von Linne, *Hortus Cliffortianus* (Amstelaedami [Amsterdam]: [s.n.], 1737), p. 454.
- 7) この4つの *Salix babylonica* の標本はリンネ協会のオンラインで見ることができる。3つめの LINN 1158. 22に「china」がメモされていることが分かる。
[http://linnean-online.org/cgi/search/linnaean_herbarium_simple?q=salix+babylonica&_action_search=Search&_action_search=Search&_order=bytitle&basic_srctype=ALL&_satisfyall=ALL] (2014. 1. 3)
- 8) Santamour, p. 181.
- 9) Maggie Campbell-Culver, *The Origin of Plants: The People and Plants That Have Shaped Britain's Garden History Since the Year 1000* (London: Transworld Publishers, 2001), p. 259.
- 10) *Ibid.*, pp. 258-9
- 11) この記述は、植物学者エイルマー・パーク・ランバート (Aylmer Bourke Lambert, 1761-1842) によって発見された、コリンソンがかつて所有していたミラーの『園芸辞書』等の本に書き込まれたメモの一部で、ランバートはコリンソンのメモを集めて発表した。ランバートは、これは柳がイギリスに最初に導入された信頼できる情報であるとしている。*The Monthly Review, Or, Literary Journal Enlarged: From May to August, inclusive. M, DCCC, XII (1812), With an APPENDIX*, Vol. LXVIII, London, 1812, p. 361.
- 12) *Ibid.*, p. 362.
- 13) Online Etymology の weeping の項目。
- 14) Campbell-Culver, *op. cit.* p. 259.
- 15) *Ibid.*, p. 260.
- 16) *Ibid.*
- 17) Blanche M. G. Linden, "The Willow Tree and Urn Motif: Changing Ideas About Death and Nature," *Markers* I, 1981, p. 153
- 18) Ann Leighto, *American Gardens in the Eighteenth Century: "for Use Or for Delight"* (Amherst; University of Massachusetts Press, 1976), pp. 308-9.
- 19) *Ibid.*, p. 487.
- 20) Thomas Jefferson, *Garden Book*, [manuscript], 1766-1824, p. 28.
- 21) *Ibid.*, p. 29
- 22) Benson John Lossing, "The Weeping Willow," *Scribner's Monthly*, August 1871, pp. 383-8.
- 23) Edwin Dethlefsen, James Deetz, "Death's Heads, Cherubs, and Willow Trees: Experimental Archaeology in Colonial Cemeteries," *American Antiquity*, Vol. 31, No. 4

- (Apr., 1966), pp. 502-10.
- 24) Linden, p. 149.
- 25) *Ibid.*
- 26) John Claudius Loudon, *The Derby arboretum: containing a catalogue of the trees and shrubs included in it; a description of the grounds and directions for their management; a copy of the address delivered when it was presented to the town council of Derby; by its founder, Joseph Strutt, esq. And an account of the ceremonies which took place when it was opened to the public, on Sept. 16, 1840* (London: Longman, Orme, Brown, Green & Longmans, 1840), pp. 54-55 に引用.
- 27) 追悼画については、拙著『アメリカ田園墓地の研究』第1章第2節「追悼画の流行」で詳しく論じている。
- 28) Martha V. Pike, Janice Gray Armstrong, *A Time to Mourn: Expressions of Grief in Nineteenth Century America* (New York: The Museums at Stony Brook, 1980), p. 129.
- 29) Draper, *The Funeral Elegy and the Rise of English Romanticism* (New York: The New York University Press, 1929), p. 335.
- 30) *Ibid.*, p. 336.
- 31) *Ibid.*
- 32) *Ibid.*
- 33) *Ibid.*, p. 337.
- 34) Connie Rogers, *The Illustrated Encyclopedia of British Willow Ware* (Atglen, PA: Schiffer Publishing, 2004), p. 7.
- 35) Robert Copeland, *Spode's Willow Pattern* (London: A StudioVista/Christie's, 1980), p. 33.
- 36) Ben Harris McClary, "The Story of the Story: The Willow Pattern Plate in Children's Literature," *Children's Literature*, Vol. 10, 1982, p. 57.
- 37) Miller, p. 274.
- 38) "The Story of the Common Willow-Pattern Plate," *The Family Friend* 1 (1849) p. 124.
- 39) *Ibid.*, p. 126.
- 40) McClary, p. 57.
- 41) Robers, p. 10.
- 42) コープランドはこれらがウィロー・パターンと呼ぶのに必須の条件であると述べている。Copeland, p. 33.
- 43) Anita Schorsch, "A Key to the Kingdom: The Iconography of a Mourning Picture," *Winterthur Portfolio*, Vol. 14, No. 1 (Spring, 1979), p. 65. ショールシュは、柳とオークと2本の木が交差していると述べているが、筆者には2本の柳か、同じ木の異なる大枝が交差しているように見える。

- 44) *Ibid.*, pp. 60–61.
- 45) *Mourning Becomes America: Mourning Art in the New Nation* (Albany, NY: Albany Institute of History and Art), 1976に掲載 (図版19/30)。
- 46) Schorsch, p. 66.
- 47) Allan I. Ludwig, *Graven Images: New England Stonecarving and its Symbols, 1650-1815* (Middleton, CT: Wesleyan University Press, 1966), p. 207.
- 48) John R. Haddad, “Imagined Journeys to Distant Cathay: Constructing China with Ceramics, 1780-1920,” *Winterthur Portfolio*, Vol. 41, No.1 (Spring 2007), p. 56.
- 49) *Ibid.*
- 50) Haddad, pp. 65-66.